書　評

大学の講義と図書館との研究

Colleqe Teaching and the Colleqe Library

American Library association, 1959 pp.110

By Palricia B. Knapp

荒　井　貞　雄

この研究の目的は，(1)大学の各講座と学生の図書館の使用程度，(2)その使用図書の範囲，(3)図書館使用をはばむ要因，(4)図書館は大学の教育計画に何をなすべきか，である。

著者はノックス大学を研究対象として選んだ理由を次のように述べている。

1. 同大学は2千以上もある米国大学のうちで，学究基準から19番目に位される代表的な教養大学(Liberal Arts Callege)である。
2. 学生数738（男女の比は8対5），教員数74（その61%43名が博士号保持者）。21専攻科があり158講が（1957年春学期）開かれ，その選択は学生の自由というまとまった小さな学校。
3. 図書館の設備は独立の3階の建物と100余名の読書席。約79150冊の蔵書，300種の定期刊行研究誌及び600枚のレコードがあり，死蔵書は少い。運営は目録，分類製作者1名，参考文献，デスク奉仕担当者1名（以上正規の司書），その他に記録購入修理及び諸般の事務を担当する書記1名の計3名ですすめる。この他に常時、若干の時間アルバイト学生はおる。開館時間は

　平　日（月一金）午前9時一午後10時
　土曜日　　午前9時一午後5時
　日曜日　　午後1時一午後5時

指定書棚，貴重資料室以外は書庫，Browsin g室を含めてすべて開放。

著者は次のように研究を進めた。

1. 50名の教授助教授と長時間におよぶ個人面接により，講座の性格，範囲，方法，クラスのレベル，聴講生の数，図書館の使用，図書館員の役割，大学管理者の役割等と当該講座の関連性，さらに教員の意見，考え方等についての正確な資料の収集。
2. 大学教務員より，学生個々人の学業成績，人物調査資料，各講座と受講生のレベル等の資料の収集。
3. 図書館の図書を用うる学生について，目的，関連講座その他の諸事項を記入する質問用紙の収集。
4. 司書の仕事についての正確な資料と意見等の収集。

この研究は1957年の春学期間（4.5.6月），著者自身に依ってなされた。

次のような結果を得た。

目的の1，2は次の表の如くであった。

類　別	貸出単行本			題目による貸出		
	頻度	全体に対する%	一学生宛	頻度	全体に対する%	一学生宛
指定書	4,185	58.67	5.67	1,961	40.80	2.68
著書目録	251	3.52	0.34	228	4.74	0.31
目録に依らないもの	2,296	32.19	3.12	2,216	46.11	2.99
講座別計	6,732	94.38	9.12	4,405	91.69	5.97
講座に依らないもの	401	5.62	0 54	401	8.34	0.54
合　計	7,133	100.00	9.65	4,806	100 00	6.51

学生数は738名

上の表で自明の如く，94%迄講座に連結している。項目別の貸出においても92%という高率を示している。

使用図書を大別すると指定図書59%，題目図書においても41%を示している。このように高率使用は学生個人の意欲要求というよりは教授が示す，またはクラスに要求する研究基準によるものが決定的である。大きいクラスは概論的なものが多く，各学生に購入させ，精読させ，小さい上級生は専ら教授の指示に基き，指定されたものを広範囲に使用して研究問題を解決する。

3. 図書館使用をはばむものに (1) 特殊の専門図書の不足 (2) 司書の手不足のため，参考図書に対する充分なる奉仕の出来ないこと (3) 連絡不充分のため，講義の進捗度に照応した図書の準備の出来ないこと (4) 教授の図書館機能の認識の不足から来る諸現象 (5) 図書館を社交場と考える学生のために学究的雰囲気の破壊等があげられている。
4. 図書館が大学の教育計画になすべきことは，(1)奉仕司書は教授会に出席して会議の内容を認識する (2)教務事務の打合会には出席してその内容を常に認識すること (3)新購入図書を各教授に提示すること (4)各教授から指定される図書の量的準備を迅速にすること，また指定図書に準ずるものは教授に諮る (5)教授，学生の要求を充たすため購入，借入れの努力をする(6)図書館が大学の頭脳とし，学究の雰囲気をつくる工夫をする。

5. 最後に，最近オハヨウ大学，イリノイス大学等において，図書館協会が行った大学図書館についての研究文献表が記載されている。

わが国の新制大学制度は，戦後米国から輸入されたものである。その大学の現在の内容は，一部のものを除いて，米国の大学のそれとは驚くべきへだたりがある。その一面が，この図書館の使用にあらわれているといっても過言でない。無思慮に何もかも米国の大学に追従することは要らないが，大学の本質を考えるとき，学ぶべき多くのものがある。中央政府の最近の統計に依ると世界の150ケ国から92,000人の学生が，1,800の米国の大学及び大学院に学び，毎年20,000人が卒業して各自の母国に帰って行く由。その中で55%が極東諸国からであり，12%が欧州各国からだという。今や，米国の大統領は憶するところなく，「米国の最大の企業は教育事業である」と叫び，「1世紀前には米国は世界最大の教育輸入国であった。然るに現在は最大の教育輸出国である」と誇る。

(1965. 9. 25—相愛学園図書館長)

老化の心理

The Psychology of Aging

Prentice-Hall, Inc. 1964, 303pp
by James E. Birren, Ph. D.

橘　　覚　勝

著者はその序言のなかで次のように告白している。「心理学的観点から，老化の過程について，全体としてできるだけ簡潔にかつあらゆる方面を網羅して敘述したもので，いわば発達心理学の一環としての成人の生活に関する心理学の教科書ともいうべきものである。専門的には勿論人生の老化過程とはいかなるものかを解明するところにあるが，それは所詮科学的な考察によって合理的に把握されたものでなければならないとして，できるかぎり従来の研究結果を参酌し引用して各章を構成した。新興科学の領域として，その具体的な資料は決して十分なものではないであろう。しかしかつては老人の生活に対する感傷やその生活価値の貧困から，科学的なアプローチはいずれかといえば敬遠されがちであったが，現在の社会情勢はかかる逃避や怠慢はゆるさなくなり，最近20年のあいだに，その科学的研究はめざましく発展した。いまそのあとをたどって本書を一応執筆した」ということである。

次に本書の内容について，各章別に摘記してみよう。

第1章　人生の時期の変容力理 (Dynamics of the Life Cyele) ——年令段階によって，社会的役割の変化と不安定，感情発動の変化，発達の不可逆性，各種観点からの年令段階，人生時期のダイミックス，相貌表出の変化，個人差の消長，突発的変貌等々の諸概念をあげて，第2章以下の考察の展開を示唆し，結局人生は生活環境の変化に対する適応如何に依存するという。

第2章　老化の社会的，文化的決定因子 (The Social and Cultural Determinants of Aging) ——老化の独立変数として経済的，社会的階層，民族性，人種性が論ぜられ，生命の長短や老人生活の類型はかかる因子にもとずくとして，アメリカ政府の医療保健統計，労働統計の結果を簡単に表示し，さらにSimmons の原始民族における老人の役割調査を引用している。

第3章　生物学的基礎 (Biological Influences) 老化および老年期の生物学的可能性を組織解剖学的に考察し，百才長寿の生物学的原理と由来をあきらかにしようとする。

第4章　各種感覚器管と知覚 (The Special Senses and Perception) ——中枢神経系統ならびに末梢感覚受容器管の老性変化，その構造の特殊化そして神経興奮度の低下は感覚的受容を年とともに減退させる。従って知覚的弁別は，高年者においては，若年者にくらべて余りに強い刺戟の場合は困難となり，かえって弱い刺戟の場合に可能である。

第5章　動作の速度ならびに時間調整と発達および老化 (Speed and Timing in Development and Aging) ——年とともに動作が遅延緩慢化するのは当然であり，動作の事態如何によらないのは必至である。若年者の場合はその条件事態の如何によっておそくなる場合もあれば速くなる場合もある。従って高年者においては時間的に制限のある動作や作業は困難であるとして，著者自身の反応時間に関する実験的研究の結果を多く引用している。

第6章　動作の熟練 (Psychomotor Skill) ——一概に動作といっても，衣食住に関する動作，交通機関の運転動作，職業における動作，運動競技における動作といろいろな面があり，それらの差異によって熟練度の発達のピークに年令的差異がみとめられる。著者はMc Farland, Welford, Lehman らの研究を引用し，運動競技の熟練のピークは22才乃至31才頃であるが，その他の種類の動作では，60才に達するもなおその減退をみないことを指示している。

第7章　学習 (Learning) ——老化の影響は学習

能力そのものよりも，むしろ知覚，注意，動機づけさらに身体的状態にあらわれるという。なお動作の学習は，作業速度という点から，また過去の習慣という点から，順調にその効果のあらわれることをみとめることが困難であり，従って最近の産業界におけるオートメ化に対して，その適応や訓練はむつかしい。

第8章　思考と知能（Thinking and Intelligence）——知能検査の結果によれば，語彙，言語理解，計算などにおいては，若年者に比してすぐれているといわれるが，課題解決というような比較的抽象的な思考においては，高年者は奇想天外というような洞察によるよりも，過去の習慣的な貯蔵反応にうったえることが多いから，考え方に「硬さ」（rigid）があらわれることが多い。

第9章　就業，生産性および業績（Employment, Productivity and Achievement）——寿命革命とともに，人間の生産期間が延長することは必至で，退職年令や退職後の生活についても考えなおす必要があるという問題，さらに技術革新の現時点ではさらに再教育，再訓練が是非とも必要であるというような問題があたらしく発生しつつある。とにかく生産高において，中高年層は若年層に比して劣るのはやむをえないが，質的方面ではまさるということが実証せられている。なお専門的業績の年令的推移については，Lehmanの 'Age and Achievement' から多くの事例を引いている。

第10章　パースナリティーの老化（Personality and Aging）——カリフォルニア大学の産業関係研究所（Reichardら）およびシカゴ大学を中心とした研究グループ（Havighurst, Newgartenら）の成果を引用してパースナリティ-の老化は，退職による生活環境からの離脱による ego-energy の減退，そしてこれによる自己閉鎖，内膏，固定によって，生活興味や生活態度が変化するという点にもとずくものであろうと結論する。

第11章　老化，適応異常及び精神病（Aging, Maladjustment and Psychopathology）老人犯罪の特殊性として使いこみ，文書偽造，自殺などをあげ，これらは，生活行動の動機ずけならびにコントロールの変化動揺に基因することを指摘している。さらに老人性痴呆に関して，脳髄の血液循環の低下減退を強調している。

第12章　回顧，諦観そして生命の終焉（Life Review, Reconciliation and Termination）——かつてHallがその著 Senescence（老年期）をかいたとき，その最後の章を The Psychology of Death（死の心理）として，その大著を完結したのと同じように，本章をかいたように思われるが，はたして Hall のその著書を紹介しかつ随所に引用している。Hall が自分の研究や見解を老年と死のうえにまとめようとしたのと同巧異曲であろう。

以上各章にわたって簡単に紹介したのであるが，実のところ，著者のいう教科書としては，アメリカにおいてさえやや行文が難解なのではないかと思われる。もうすこしスラスラとかけなかっただろうかという感が深い。尤もこれは日本の読者からの注文であるかも知れない。しかし行文のいたるところに，著者の篤実な学究的性格がうかがわれて感服のほかはない。

紹介者のわたくしは，すでに著者の研究室——ベセズダの国立衛生研究所内精神衛生研究所にある——を訪れたこともあり，また私宅も訪問し，さらに国際学会ででも再三会っている。氏は寡黙真摯なイギリス風紳士であり，学究者である。序言にかかれているように，若輩の同僚に本書に対する助言や訂正をもとめているところからも，氏の風貌性格を髣髴させることができて，ほんとうになつかしいしかもうらやましい気がする。

(1965. 9. 7)

飯　田　正　一

「歌集レンバン島」

田　中　重太郎

別項消息欄にしるされたやうに，本学国文科では，最近二十二鉄玄教授をうしなった。教授は，歌人丹草二として，つとに水甕派で活躍せられ，本学卒業生，在学生にながく短歌の指導をせられ，歌人として，教育者として，大きな功績をあげられた方である。

最近いただいた数冊の歌集のうち，本学ならびに二十二教授にゆかりのある飯田正一講師の「歌集レンバン島」を特に選んで，ここに紹介し，二十二教授を悼むこころの一端を表したいと思ふ。学術誌であるこの研究論集に歌集の紹介をすることの非常識はよくわかってゐるが，このたびは，歌人丹草二先生を偲ぶことのたよりとして，また国文科在学生の歌心を養ふしをりとして，この非礼をゆるしていただきたい。

本書は追憶の気持の強い歌集であって，戦時色や国粋色があり，いまの若い女性にはやや理解し難い点もあらうが，これも二十二先生へのたむけの文としてゆるされたく，ときの流れと人間性を考へるたふとい資料として，その作品を味はってほしい。その作品には，不易の人間性が感じられるはずである。

飯田正一氏は，昭和9年以来関西大学教授であられるとともに，本学国文科の講師として昭和25年4月短

期大学創設以前——女専国文科のときからずっと近世文学を担当していただき，本学に深い関係のある先生である。

歌集レンバン島は，槻の木叢書第22編である。それは，飯田先生が早稲田大学文学部関係者（昭和2年卒業）であることを教へてくれよう。いふまでもなく，「槻の木」は窪田空穂氏の主宰せられる歌誌である。

この歌集をわたくしは，昭和40年9月6日，大阪市東区餌差町の円珠庵における大阪国文談話会総会の席上で著者から賜はったが，帰りの車中で一気に読み終へ，その真実の声にうたれた。感激のあまりゆれる京阪電車特急の車中で，その感激の一端をいただいた本の末尾の余白に綴ってゐる。

歌集レンバン島成立上梓のいきさつは，著者みづからのあとがきにしるされてゐる。すこし引いてみよう。

> この歌集は，私が終戦後，シンガポールのずっと南にあるレンバン島で，抑留生活を送っていたころの歌が主となっている。（中略）全部未発表のものである。
>
> 終戦からもう20年経つ。それほど古い歌である。が，当時のことは遠い日のようでもあり，ほんの昨日のようにも思える。（中略）集中の歌を詠みかえしていると，当時のことがまざまざと思い出されて，胸を締めつけられるような感慨を覚える。個人の感懐だといってしまえばそれまでだが，当時の生活が，いまも私自身のなかに大きく影響していることも否定できない。その意味では，これらの歌はあるいは歌でなく素材そのものといった方がいいかも知れないが，私自身のなかに現在も生きているのである。

著者は，昭和16年応召，横須賀重砲兵聯隊補充隊へ，古い幹部候補生出身者として入隊せられ，昭和18年11月11日門司出港，同12月1日昭南（シンガポール）に入港，第18独立守備隊司令部附となられたが，20年3月中隊長に転出し，陸軍大尉として終戦を迎えられた。

> 昭南撤退のとき，身辺はすべて整理し，持っていた書物なども全部焼却してしまったが，センブロン（ジョホール州）までは，まだ図嚢の中に岩波文庫の「万葉集」と，冨山房百科文庫の「建礼門院右京大夫集」が入っていた。小さくて手軽だからでもあった。それも，検閲を受ける前に焼いた。文字のあるものはすべて携行してはならぬと命令ので，一切合財焼いてしまったのである。それまでの歌稿類も同じく火中に投じた。
>
> 終戦後は，食うや食わずのひどい状態だったが、レンバン島に上陸してからは，一層みじめな生活が始まった。私たちは，それこそ餓死寸前というところまで追いやられたのである。誰れもかれもすっかり衰弱しきってしまった。そんななかで，ただ一冊の小さな手帳に書きつけておいたのが，本集の歌である。支給された塵紙に書いたりしたものもあったが，それは大部分散逸した。
>
> 肉体が衰えれば精神も衰えよう。ここの歌に自信はない。編集の都合で，手帳の中から百数十首省いたが，それでもやっとこの程度である。恥かしい。

この歌集の出来た由来は，右のような次第である。あとは，各自が先生のお歌を読めばよいのであるが，すべての人が買ふわけにもいくまいし，読める環境を与へられるともかぎるまい。わたくしは，わたくしなりにここに30数首を抄して紹介にかへたい。ただ，この歌集には叙事詩的な面があり，一首一首を独立させての鑑賞に，多少むりなものもあることをおことわりし，できれば，連作的なものは原本によってその前後を味読していただきたいと思ふ。国民として，軍人として，そして，学者として，歌人として，父として，夫として，子としての著者のお心のよくうかがへる歌を選んでみよう。

現地で，「内地への郵便を許されて」との詞書による次の二首がある。

> 許されしただ一通の郵便は生死知らざる妻に認むちちのみの父はあれども許されし便りは妻子にためらはず書く　（現地自活）

わたくしは，この歌集所収の数百首の歌を読んで，特にこの二首に飯田先生のあたたかい愛の讃歌を思った。いま，あなたはだれともあへない環境におかれてゐる。そして，ただ一枚のハガキが手渡され，もし，だれか1人だけにこれを出すことをゆるされたとしたら，あなたは，それをだれに出しますか。もちろん，その人の環境にもよるが。

飯田先生の厳父と令閨とは別に住んでをられたらしいが，いまならともかく，戦時中において，親よりも妻に「ためらはず」「便り」を書かれたそのお心を尊敬するのである。もっとも，これはすでに結婚をした人でないとその心境を解し得ないであらうが。

> 郵便を許されしかば巻煙草の包装紙もて葉書を作る
>
> 包装紙延べてつくれるこの葉書妻子が手にせむその日を思ふ
>
> 生きてあるただそのことを認めて苦しき日々の上には触れず
>
> 帰還せむ日は知らねども生きてわれ帰るべき日を

妻よ子よ待て　　（現地自活）

これらは，前に掲げた二首につづいての作品である。

壮士時（をさかり）の子の四人をば戦ひに征かしめてより老いましけむ父
老い給ふ父のかたへに遠く征でし子の一人だにはや帰らしめ
東京にとどまりたらむわが父の生死聞き得む日はいつならむ
生死さへ知らぬ妻子も健かにありとしせねば思ふに堪へず
昨夜（きぞ）の夜の夢に見えたる妻子らの微笑む顔を心に恃む　　（野草）

海藻を拾ふと磯に立つ兵の夕日に照れる裸形衰ふ
独りあらば狂ひ死ぬべきひもじさと思へど堪ふる共に堪へつつ
雑炊にまじれる粃の一粒も丹念に食ふ嚙みわけながら
再びを遭ひがたき世に生きてわれ飢ゑて死なむか南の島に　　（野草）

戦ひに征でて来しより明けくれはわが学問に遠き日なりき
一冊の書さへ読まずて久しきを衰へにけむわが読書力
生得の愚かさ嘆け生涯をかけむわが道ひそかに思ふ
還らむ日いつとは知らね学問に寄する思ひの湧き立ちゆらぐ　　（わが道）

家ぬちに父のをらねば童らもおとなしくゐむ童さびして
雛一つ祝はざりしを時に悔い見ずて久しき吾子をしぞ思ふ
男の童病みたる後はよく拗ねて泣きつづけゐしうしろ姿よ
ただ一目見しのみなりし末の子は朧気にだに顔も浮かばぬ
四人の子一人死なして戦ひに征で来て思ふ殊にその子を　　（子らを）
暁の夢に見えしは玉の緒の絶えなむとして苦します母
死に給ふ母とは思へ傍らに侍る日われに多からざりき
（母の命　昭和18年4月4日母病死。われ応召して横須賀重砲兵聯隊補充隊に勤務中なりき。その前後を）

秀歌は多い。しかし紹介すべき紙数がない。復員の期待とよろこびとの歌百三首の中から数首抄して，この紹介を終へよう。くりかへしていふ，この歌集は，飯田先生の，人として，学者として，歌人としての，こよなくたふとい人間の記録であると。心から必読をおすすめする。

ほの暗き改札口に手を振るは妻にあらずやまさしく妻なり
暁の駅に下り立ちたまきはる命生きたる妻と相見つ
生死すら知らざりし日も妻子らに会へむをわれは疑はざりし
幼らの眠れるすがた蚊帳越しに見てはおどろく背丈の伸びを
妻が灯すみあかししろく揺れ立てり暁ちかき風の流るる
朝覚めてわれを見出でし幼らの笑みては見するそのはにかみを
諸手つきて朝の挨拶する吾子に涙にじみてうなづきかはす
（6月29日宇品に上陸、復員。家族の所在明らかなねど、一路妻の郷里に向ふ）
焼跡の畑に立つは父なりき見ても疑ふその老いますに
（父は、弟一家とともに東京にありき）

（謄写タイプ刷B6版248頁　発行所　大阪府吹田市千里山484　関西空穂会　昭和40年8月15日刊　定価600円）

Arthur Hedley; Selected Corespondence of Fryderyk Chopin と邦訳について

佐　藤　允　彦

未だに毎年2，3冊は，ショパンの新しい本が出る程ショパン・ラッシュが続いている。これまでショパンの伝記・研究書といえば，Frederick Niecks; Frederic Chopin as a Man and Musician や Edovard Ganche; Frederic Chopin: sa vie et ses oeuvresの有名な二著を想い出す人もあるかも知れないが，ショパン研究についてはもはや完全に二十世紀で，伝説や寓話の類は，その立場を失くしてしまい，ガンシュ，ニークスの二著は，さしずめ古典といったところである。ショパンの書簡集では M.Karasowski; Life and Letters of Chopin と Henryk Opienski; Collected

Letters of Chopin が一番有名であろう。カラソフスキのものは「ショパンの生涯と手紙」，(柿沼太郎訳，音楽文庫,)オピエンスキのは「天才ショパンの心——ショパンの手紙」，(原田光子訳，第一書房)となって邦訳されており，第二次大戦後1955年，ワルシャワのショパン協会の編集した「ショパン書簡集」二巻 Korespondencja Fryderyka Chopina (Panstwowy Instytut Wydawniczy 1955) I 583pp. II 606pp zl. 97. 40 が出版されるまでは，代表的な書簡集であった。カラソフスキの書簡集は，1877年ドレスデンで発行され，その後ポーランド語と英語に飜訳されいてる。柿沼氏の訳は，恐らくドイツ語の原典に依られたものと思うが，オピエンスキの英語版と共に完全な書簡集ではない。カラソフスキ，オピエンスキの個人的なショパン像が強く出ており，伝記としても間違った点が多いのは既に研究者の間で指摘されている通りである。

ショパンの手紙は，ポーランド語とフランス語の二種類に分けることが出来る。ポーランド語のものは，パリ以後にも多く，同国人との間に書かれ，生国の言葉だけに表現にも彼らしい冗談や会話体がそのまま生きて，実に個性的な味がある。それに反しフランス語は，如何に父親がフランス人でフランス語に早く親しんでいたとはいえ，所詮外国語の域を出てはいない。二国語を用いて書かれた書簡集を作る上で，最難の問題はポーランド語という，いとも厄介な言葉が使われていることで，このためにポーランド語から独語又は英，仏語に飜訳される時に，沢山の誤訳が自然に生れたのも無理はない。実際，ショパン協会編の書簡集の中にも，沢山難解な表現があって謎めいており，アプレのポーランド青年に尋ねてみても，サテと首をかしげることが多かった点からみて，彼の書簡の飜訳がどれ程難しく，大事業であるか判るであろう。その上，ポーランドには西欧にない独得の風俗・習慣があって，これを理解しながら各国語に飜訳することは，至難の業といわねばならない。

Arthur Hedley; Selected Correspondence of Fryderyk Chopin (William Heinemann Ltd. 1962) 375 pp+25 pp は，ポーランド語のショパン書簡集と違った意味で，恐らく後世に残る名著であることは疑いない。著者ヘドレイ氏の名は，Grove's Dictionary of Music and Musicians のショパンの項の執筆者で、"Chopin" Master Musician Series (J. M. Dent & Sons Ltd.,1947) 176 pp+38 pp のショパン研究書があり，早くからその名を知らされていた。計らずも，本年行われた第7回ショパン・コンクールの際にお目に掛ることができ，食事を共にしながら多く教えて頂くことが出来，非常に幸せであった。ヘドレイ氏はフランス文学をソルボンヌで研究し，学位を取られた後帰国，ショパンの研究を始められてからポーランド語の必要性を痛く感じたため，ポーランド語の学習にふみきられたそうである。幸いにもロンドンには，数万人のポーランド人やポーランド系の人が居住していたために，彼等に教えられたり，数度ポーランドに赴いて研究された。それが非常に役立ち，今はポーランド人と変らない程流暢なポーランド語を話されるし，ショパンの書簡の飜訳に Sydow と共同作業を始められた由，その間の苦心談などお互いに外国人がポーランド語を勉強する際に感じるあの苦痛を話しあった。

ヘドレイ氏の書簡集は，確かにユニークで後世に残る名著であろう。序の中で述べているように，この書簡集は英国人のために訳されたのが第一の特徴である。ポーランド人の独得の表現法や余り必要でない内容は思い切ってカットしたり，彼の生涯と音楽活動を知るのに最少限度の必要を生じるもの以外は，書簡集に取り入れられていない。原文でショパンはふざけたり駄酒落を使ったりして読む者を困らせているが，それも思いきってカットされている。カラソフスキやオピエンスキの著書の中では，書かれた時期が判らないままにカッコの中に「……であると思う」とされていたような面も，最近のショパン研究の成果をとり入れて日付も完全である。第二に，ヘドレイ氏は，この著書を単なる書簡集でとどめず，「全生涯の動きを，手紙で大体一貫した物語りとして読めるように」まとめあげている。往復書簡を中心に置いて，手紙と年代の間に短かい解説をはさみ，心にくいばかりにその意図を成功させている。ショパンの文献ではコルトーの Aspects de Chopin がユニークな著書であるが，方法は違っていてもショパンの人間像を造りあげる上で，大変面白く，カラソフスキやオピエンスキのものとは比較にならない史実に対する忠実さをみせている。更に，もう一つ注意すべきことは，ポーランド判にもないショパンの弟子 Joseph Filtsch の手紙や George Sand の第三者宛の手紙なども含んでいることで，パリ時代のショパンを知る上では非常に貴重であるばかりか便利である。殊にフィルチの手紙は，ヘドレイ氏の自慢のものもあり，こうした第三者の手紙の内容に依り，ショパン像を客観的に浮き出させようとしている辺りに，ヘドレイ氏の研究態度の一端がうかがえる。又，今では完全な似物として葬られている Delphin Potcka の手紙に触れ，似物であることを看破る迄の彼の苦心を語り，マッカな似物であると痛烈に非難している。ポトツカの手紙は，1945年に発見されたもので，Casimir Wierzynski; The Life and Death of Chopin「ショパン」(野村光一，野村千恵共訳，創

元社刊）の中に多く取り入れられているが，若しその手紙が真物であるとすれば，ショパンの作品に大きな註が入る可能性のあるものだけに，ヘドレイ氏の研究は実に貴重なものになっている。

この本の邦訳が進行中であることを，ヘドレイ氏からワルシャワで聞いた。そして，繰返し繰返しこの本が日本で理解されるかどうか心配されていた。というのは，もともと英国人のために書かれたもので，飜訳の時にポーランド語の表現を英国人に判るように，英語独得の表現に置き換えた点が沢山あるからである。小松雄一郎氏の訳は，多少読みにくい点もあったが，成功であろう。然し惜しむらくは，地名，人名に読み違いが多く，フランス語の面にもポーランド語の方にも多々見受けられる。殊にあとがきの中で，ポーランド人の名前，地名の読み方は，ポーランド大使館員の助けを借りたと，断ってあるにも関らず，誤読の多いのは今迄の邦訳を参考書に使われたためと考えられる。例えば，スザファルニアという地名が多く出てくるが，Szafarnia シャファルニアであり，野村氏の訳にも同じ誤りがある。この程度のことは許される範囲かも知れないが，目茶苦茶に読まれてきた人名や地名を，此の際完全に読んで過去の過ちを訂正すべきだと思う。